

新しきものを育む

内山 伊知郎

奨励者紹介〔うちやま・いちろう〕

同志社大学心理学部長

同志社大学心理学部教授

〔研究テーマ〕乳幼児の認知・感情発達の研究

あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

(ローマの信徒への手紙 12章2節)

新島襄の若き日

創立記念日が近づいてきました。同志社は、今から144年前の1875年に創立いたしました。当時、英学校として、新島襄先生がアメリカで学んだ西洋の学問を学ぶ学校として設立いたしました。1875年は明治8年であり、明治維新から8年の月日がたっていました。ですから、西洋の文化が日本に入ってくる時期であり、同志社のみならず、東京には明治学院の前身の学校、熊本には洋学校など、西洋の学問が紹介される学び舎ができていた時期でした。

同志社は、当時の日本人として貴重な経験を米国で積んだ新島先生が、学問のみならず、アメリカに根付いた精神性であるキリスト教主義に基づき、学校を作った点で特徴があると言えます。そこでは、徳性があり、品行が高尚で、精神が正大な人物を育て、良心を手腕に芸芸才能を運用する一国の良心と言える人を世に送り出すことを目的としています。

では、新島先生はどのような時代に生まれ育ったのでしょうか。江戸時代に安中藩の武士の家に生まれ、父親は祐筆(ゆうひつ)という藩の秘書役で、公文書などの作成などを行う事務官僚でした。当時は、世襲でその仕事を継ぐのが一般的で、新島先生は子供時代から学びの環境にあったと言えます。実際、現代の中学生から高校生の時期にあたる青年期には、中国からの学問である漢学や、オランダを通じて日本に入ってきた蘭学を学ぶ機会がありました。その頃は、閉鎖的な社会と海外からの新しい情報が入る、新時代への変り目でした。現在の学制にあてはめると大学生くらいの頃に、新島先生は英語による英学やアメリカの社会に関する知識を得て、自由な国、アメリカに興味をもち、そこで学ぶという目標に向かって着実な積み重ねをしました。そして苦勞の末、1865年の22歳の時にワイルド・ローバー号でボストンに到着することができました。

アメリカではワイルド・ローバー号の船主であるハーディー氏の支援の下、名門のフィリップス・アカデミーで学び、そしてアーモスト大学を27歳で卒業するとアンドーヴァー神学校で神学を学んでいます。そして、1874年に31歳で帰国し、同志社を創立するために奔走するわけです。10代後半の青年後期から20代のヤングアダルトの時期を、アメリカにあこがれ、その希望をかなえアメリカで生活することができたわけです。

アメリカでの新しい体験

アメリカで目に触れたものすべてが新鮮で新しい経験であったと思います。ハーディー氏に連れられ、日曜日の礼拝に参加したのは、ボストンにある重厚で荘厳な雰囲気のあるオールド・サウス教会です。同志社大学附属の同志社小学校では、この数年間、ボストンへの修学旅行で、オールド・サウス教会の日曜礼拝に出席しています。礼拝では新島先生が建てた同志社の小学生が訪問していることが紹介され、礼拝後には、小学生が一同登壇し、歌の交流をしています。私もオールド・サウス教会を初めて訪問した時にはその雰囲気に感動しましたが、当時の日本から渡った若者である新島先生がそこで得た感動は想像することができます。

また、ボストンの街中でフリーダム・トレイルを歩けば、市民の憩いの広場であるボストンコモンやアメリカ合衆国にとって重要な史跡である旧マサチューセッツ州会議事堂などアメリカの建国の歴史を感じることができます。新島先生がボストンに到着した1865年は、アメリカの南北戦争が終結した年で、アメリカ北部のボストンでは自由に対する雰囲気が高まっていた時であったと思います。その中で自由の雰囲気を体感したと思います。

大学時代を過ごしたアーモストの街ではどのような経験をしたのでしょうか。アーモスト大学は、1821年に設立された大学で、アメリカ東部でリベラルアーツのトップ校です。1867年にアーモスト大学に受け入れられましたが、当時は大学設立46年目の比較的新しい頃で、日本人としては初めての学生でした。緑豊かで広大なキャンパスで、ジョンソン・チャペル隣の学生寮での生活は敬虔で新しい学びの機会であったと思います。

自らの関心でもっての活動も精力的にしています。今後の日本には鉱業が必要と考え、1868年の夏休みには5週間以上にわたり、640km以上を歩いて鉱物の採集をする旅行をしているそうです。ウスターで友達たちと落ち合い、ボストン、アンドーヴァーとフルーム渓谷まで一緒に旅をして、そこで友達と別れたそうです。それは友達が鉱山に興味がなかったからだそうで、そこからは一人で旅をしたそうです。その後、リスボンの金鉱やウォレンの銅鉱などを回り、鉱物の知識を得たそうです。また、ハノーヴァーを通った時にちょうど開催中であった医学校の講義に出席し、鉱物学の勉強をしたそうです。

東洋から来た新島先生が、そのようなまじめで熱心な生活を送るのは、アーモスト大学の学友にとっても大変興味深かったと思います。新島先生はアーモスト大学にも大きな影響を及ぼしたと言われています。新島先生が卒業した年の同級生で、最も印象的だった同級生を選び、肖像画を描こうとなった時に、新島先生が選ばれています。その肖像画は、今でもジョンソン・チャペルの正面右手に飾られています。アーモストの人々とのつながりは、先生、学友と幅広かったと思われる。このような国際交流は新島先生にとって、渡米して得た大きな財産で、その後もたびたびの渡米の原動力になっていると思います。

新島先生は、アメリカでの生活で、向こうの植物、野菜や果物も気に入っていたようです。アメリカから持ち帰ったカタルパの種を徳富蘇峰に送って励ましたことは有名です。また、自宅の庭で当時の日本では珍しいアスパラガスやイチゴを栽培していました。アスパラガスは、アーモストでも6月に収穫祭が行われています。皆で、感謝をもって食べるのですが、栽培が難しいそうです。帰国後、日本で栽培にいち早く成功していた津田仙氏からアスパラガスの苗を送ってもらって育てたという記録があります。津田仙氏は津田塾大学を創設した津田梅子氏の父親です。また、新島先生は「ぜんざい」と「そば」が好きということですが、他にも新島邸

ではワッフルもよく焼いていたようで、アメリカンな生活ぶりがうかがわれます。学生たちにも洋風の食事をよく振る舞っていたそうです。

このように、「キリスト教主義」「自由主義」「国際主義」の起源となる多くの経験をしてきたと思います。

文化と発達

新島先生は、アメリカで新しい文化を修得したといえます。私たちはもともと自然に文化を身につける力をもっています。その研究者として有名なのはアメリカの心理学者であるジェローム・ブルーナーです。ブルーナーは私たちの認知能力の発達に文化が影響を与えることを指摘しています。私たちは生得的な発達プログラムだけではなく、親や学校、社会によって文化的な影響を受け、発達していくことは、多くの研究者によって明らかにされています。乳児は、周囲にいる保護者の様子から、外の世界が自分にとってどのような意味をもつかを察知します。また、物の名前などは保護者とともに注意を対象に一緒に向けることにより修得していくことも確かめられています。

私たちは、知らず知らずに文化や社会の文脈によって影響を受け、文化における生活スタイルや精神性を修得し、文化化しているのです。それは乳児期から始まりますが、生涯続きます。エリクソンという生涯発達の研究者は、子供は親からの学びで成長し、親は子供に教えることで成長すると言っています。また、青年期になると、自己が形成される時期となりますが、エリクソンは、その頃に意識的に自己と周囲の世界を見つめ、新しい自分を形成すると言っています。新島先生も新しいアメリカの文化と出会い、自分が形成され、そこで得たものを大切に育ててきたと思います。そして、当時の日本でさまざまな苦勞を乗り越え、同志社の文化を育てたと思います。

新しき同志社の

心を育てる

新島先生は、アメリカから多くを取り入れ育みました。取り入れられた多くのものは、すでに日本で馴染みの存在になっていますが、この同志社の理念から生み出される学園文化は、144年を経てもなお新鮮であると思います。私たちは、新島先生がつくった文化圏である同志社で、新たな体験として、キリスト教主義、自由主義、国際主義に基づき、良心を培う学園文化に触れながら生活しています。この文化を経験し、ここで得た心を生涯にわたって育てていくことが大切だと思います。私たちは一層良心の満ちた学園を築くことができればと思います。新島先生がアーモストを訪れて感じたように、ここを訪れる人が啓発され、それを身につけ、さらに、生涯にわたって社会の中で大切に育てていけば、良心の種が日本各地で開花し、広がっていくと期待されます。

2019年11月20日 京田辺水曜ランチタイム・チャペル・アワー

「創立記念礼拝奨励」記録